

# IOC岩切おもしろ歴史講座

## 【ざ大奥】

講師 三浦雄司

日時：2020年7月10日 午後1時30分

場所：岩切市民センター 第2研修室

江戸城大奥と言いますと何かしらハーレム的なイメージがあって「いいな」、「うらやましいな」と思いますが、私達がイメージする世界とはちょっと違うようです。

人は「衣、食、住」が満たされると次ぎに求めるものは「ステイタス・名誉」と言われています。地位があり、裕福な家庭の子女は江戸城大奥勤めに憧れます。大奥での2～3年間勤め終えた後は「御殿下り」と言われて、良縁が殺到しました。奥勤めは江戸城に限らず、諸大名の家中、旗本衆にもあり現代で言う女子短期大、女子大の感覚でした。その中でも江戸城大奥は超名門大で無競争率は非常に高かったようです。垂涎の的だったようです。

### 大奥の構成はどうなっている

- ① 御台様（みだいさま）  
将軍の奥様
- ② 上ろう（じょうろう）  
御台様の側近（家格は高いが、権力は低い）
- ③ 御年寄り（おとしより）  
俗にお局と呼ばれる、年は取っていないが、大奥第一の権力者。老中と同等の力を持つ。
- ④ 御中ろう（おちゅうろう）  
若手の上級役人 将軍のお手がつくのはこのクラス
- ⑤ 御坊主（おぼうず）  
50歳前後の尼姿で将軍付きの用件を担当する。
- ⑥ 御小姓（おこしょう）  
側近の少女隊
- ⑦ 表使い（おもてづかい）  
外交官
- ⑧ 御次ぎ（おつぎ）  
諸道具の管理を担当する
- ⑨ 御祐筆（おゆうひつ）  
書記担当する

⑩ 御錠口衆（おじょうぐちしゆう）  
大奥の出入り口の管理を担当

⑪ 御切手（おきって）  
面会人の監視役

⑫ 呉服之間（ごふくのま）  
衣類調達の指示管理

⑬ 御三之間（おさんのま）  
給水・湯、燃料の調達・管理

〈 これより御目見得以下 〉

※どんな美貌の女性でも将軍の目にとまることは永遠にありません。

⑭ 御仲居（おなかい）  
調理担当

⑮ 御火の番（おひのばん）  
火の元の管理

⑯ 御使番（おつかいばん）  
屋内の文書、伝言を担当

⑰ 御末（おすえ）  
雑役、力仕事担当、町人の使われ所

⑱ お犬（おいぬ）  
お末の年少組

⑲ 部屋方  
高級職員の使用人（大奥では組織外）

※ 江戸城大奥女中は20以上の職階に分かれていたようである大奥に入るのには、一にも二にもコネです。コネを付けるために多額のお金を使いました。次には特殊芸能です。

「唄」、「踊り」、「習字」等です。もう一つは「力」です。奥方様やお局様は深窓育ちですので玄関に行くのに大奥の施設内の廊下、部屋間を籠で移動します。その為に体力のある娘は採用面では比較的有利なようでした。

悲願待望の江戸城大奥に入れても「籠かき」や「井戸汲み」等の人足仕事に明け暮れただけでも2・3年経って卒業すれば立派な「元御殿女中」として通りますし、結婚する際に箔がつかます。

見よう見まねでの行儀作法や御殿言葉を見せ付けられると、大奥の世界を伺い知ることのできない庶民には大変にまぶしいものように見えたのでしよう。

## 主導権争いが繁しかった世界

〈主たる事件としては〉

### ★ 絵島・生島事件

1714年 大奥の年寄りの絵島は7代将軍（家継）の生母。月光院の代理として増上寺に前将軍（家宣廟）に参詣した。その帰途、山村座で美男で評判の高い生島新五郎の演劇を観劇した。一行は栈敷に陣取って酒席を設け、幕間に置いては新五郎のもてなしを受け、大いに盛り上がった。その為に、江戸城への帰城が遅れてしまった。

今回の一件には前将軍（家宣）夫人の天英院と現将軍の生母で家宣の側室月光院の対立という大奥内部の人間関係が複雑に絡み合っていた。月光院には幼い将軍を支える新興勢力が、天英院にはこれに反発する譜代勢力が控えていた。その為に事件は思わぬ方向に発展。

絵島は謹慎処分を受け、死一等を減じられ遠島処分になり高遠へ、生島は三宅島に流罪に、生島に同行した女房達や生島の兄弟達も含めて大量処分される。

### ★皇女和宮降嫁

朝廷はかねて幕府より要請されていた和宮（15歳）を14代将軍家茂（15歳）と結婚させる事に同意した。条約調印問題などで朝廷と幕府の間に軋轢が生じていたので公武合体政策をとり、将軍家茂との結婚を提議したのである。和宮内親王は孝明天皇の異母妹で、すでに6歳時に有栖川宮たる仁親王と婚約していた。和宮は当初承諾しなかったが朝廷の説得に屈した。

1861年に京都を出発して中山道を通って江戸に向かう。

将軍家茂との結婚は江戸城で行われた。大奥での対応に対して和宮の随行した女性達から「御所風」の対応をするよう強く要請されたが、大奥では拒否し、「江戸では江戸城での慣例に従うよう」反論され、激しく対立した。幕府派と皇室権威派が幕府と朝廷を巻き込む事態になり、混迷を極めた。

最終的には和宮の判断で今までの大奥の慣例を尊重するという態度になった。

※和宮に随行した人達が大奥の主導権を持つと幕府の地位が低下して、人間関係と利害関係、組織内人材配置が大きく変わってしまうのでは不安が大きかったようです。